

三の丸遺跡出土の奈良・平安時代土器

—尾張の集落址における様相—

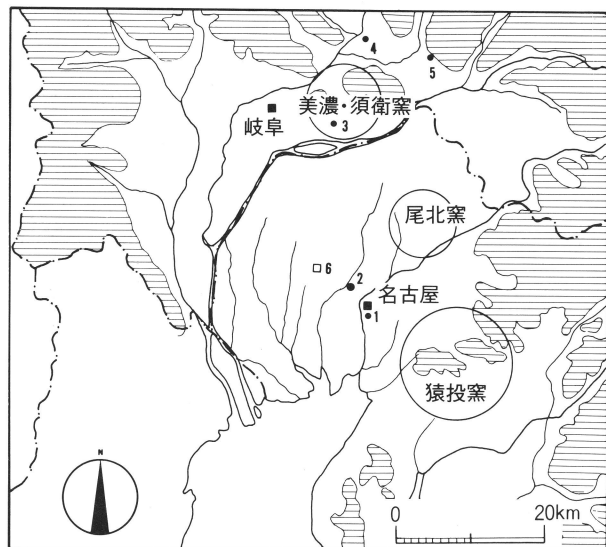
城ヶ谷 和 広

I はじめに

三の丸遺跡は近世において名古屋城三の丸内の武家屋敷地となっていたところで、下面には弥生～中世の遺構がある。今回調査された62E、63A～E区は三の丸西南角の御園門の内側にあり、地理的には熱田台地の西端に立地している。古代においては、掘立柱建物1棟、竪穴住居数十軒が発見され⁽¹⁾、この付近にかなりの規模の集落が展開していたことが想定される。

今までの調査例をふり返ってみると、名古屋市内でいくつか竪穴住居を検出した遺跡はある⁽²⁾が、いずれも都心ということで、調査面積も狭く詳細を検討するのは難しかった。尾張全体を見てみても当該期の良好な集落址の報告例はほとんどなく、近くでは美濃の山間部に近い岐阜県富加町東山浦遺跡⁽³⁾・関市重竹遺跡⁽⁴⁾・各務原市三井遺跡⁽⁵⁾などが知られるのみである。

古代の尾張国には猿投山西南麓古窯址群（以下、猿投窯とする。）・尾北古窯址群（以下、尾北窯とする。）といった窯業の一大中心地があり、その研究も進んでいるが、一方では集落址の調査例に乏しく、その様相ははっきりしなかった。今回調査された三の丸遺跡では、遺物の量が特に豊富とは言えないが、遺構に伴う遺物群がいくつか見つかっており、8～10世紀における古代集落址の土器を考えるにあたり、一つの手がかりとなるであろう。



第1図 遺跡位置図

- 1 三の丸遺跡
- 2 清洲城下町遺跡
- 3 三井遺跡
- 4 重竹遺跡
- 5 東山浦遺跡
- 6 尾張国府推定地

そこで本論では三の丸遺跡の奈良・平安時代の住居址・土坑出土遺物を中心として、尾張における集落址での土器のあり方について検討を加えてみたいと思う。

II 各時期の様相

遺構のあり方から時期を1期（8世紀前葉～中葉）、2期（8世紀後葉～9世紀前葉）、3期（9世紀中葉～10世紀前葉）に分けるものとする。

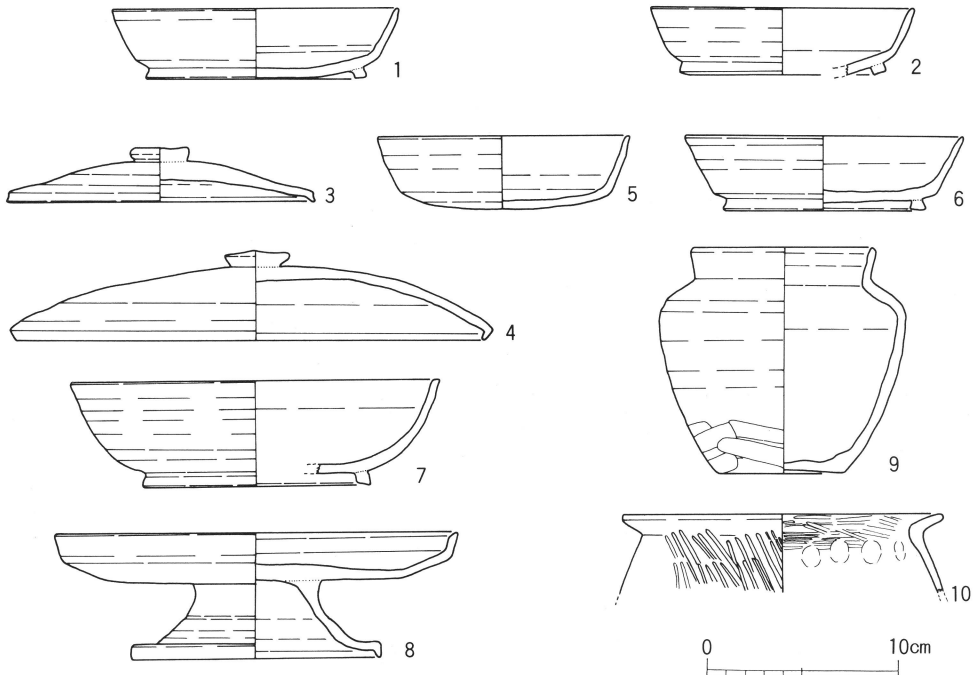
1期（8世紀前葉～中葉）〔第2図〕

この時期の特色は古墳時代の伝統をひくものが残るが新しく登場した器種と入れ替るときで、両者が混在して見られる。器種的には最も豊富で、供膳形態に見られる器種分化も激しい。生産地に対応させればC-2号窯期～NN-32号窯期⁽⁶⁾にあたる。

三の丸遺跡ではD区SB11・SB37、A区SB114等があげられるが、いずれも遺物の量が少なく検討が難しいので、清洲城下町遺跡62E区SB07出土土器⁽⁷⁾を加えて検討することにする。清洲城下町遺跡SB07は一辺約7mの方形の竪穴住居で、覆土中より大量の須恵器・土師器が検出されている。

1期の遺物として、須恵器杯蓋・杯A⁽⁸⁾・杯B・椀A・椀B・盤B・盤C・高杯・平瓶・長頸瓶・横瓶・短頸壺・甕・甑・甗、土師器甕などがある。

杯蓋（第2図-3・4）は天井部1/2を回転ヘラケズリするもので、口縁端部はややまっ



第2図 三の丸遺跡出土土器(1)・清洲城下町遺跡出土土器 (1・2三の丸遺跡D区S B 37 (3・10城下町遺跡62E区S B 07))

すぐのびるものである。杯BⅠ～BⅣに対応するものと思われる。無台杯身である杯A（第2図—5）は底部を回転ヘラケズリするもので、口径によりAⅠ（口径13.6cm×器高4.0cm、以下同様に表記する。）・AⅡ（12.4×4.0）に分かれる。有台杯身である杯B（第2図—6）は底部を回転ヘラケズリするもので、腰の出はあまりはっきりしないものが多い。また底部が高台よりも下へ突出するタイプ（第2図—2）も若干見られる。杯Bは口径によりBⅠ（19.2×6.4）・BⅡ₁（17.0×7.4）・BⅡ₂（17.4 ×6.4）・BⅢ（16.0×5.8）・BⅣ（14.9×3.9）・BⅤ（13.3×3.9）・BⅥ（11.7×3.9）に分けられる。無台の椀である椀Aは底部に回転糸切り痕跡を残すものである。有台椀である椀B（第2図—7）は体部が丸味をもつものである。7世紀代より残るものとして高杯・甕などがあるが、これ以降には見られない。土師器は甕のみが存する。口頸部はくの字状に短かく開くもので、体部はあらいハケメを施す。口縁部は内面ヨコ方向ハケメ、外面ヨコナデで調整する。

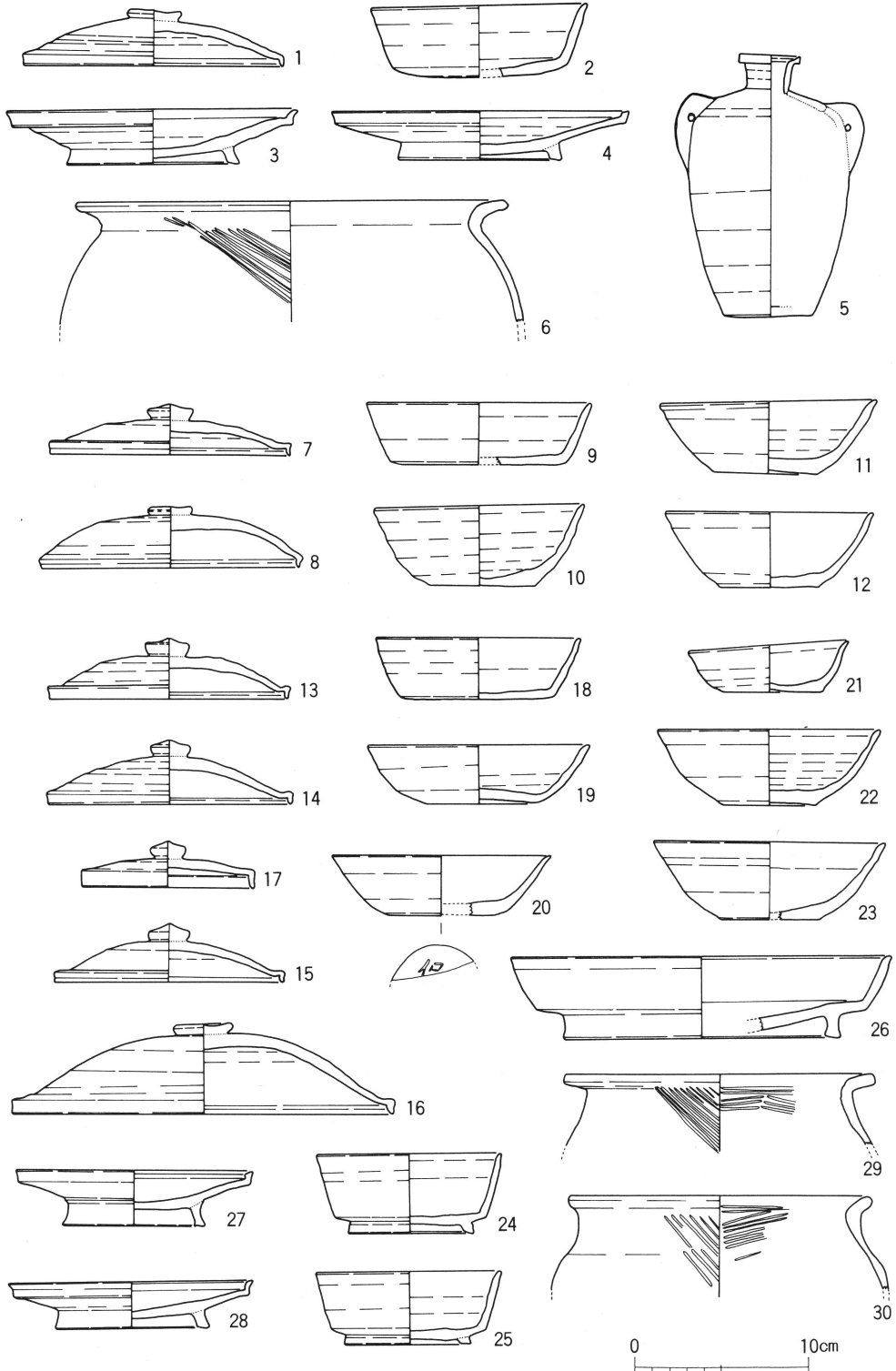
2期（8世紀後葉～9世紀前葉）〔第3図〕

この時期になると器種が減少し、器種分化も少なくなり、1～2種類の量に集約されてくる。生産地に対応させれば0—10号窯期・IG—78号窯期にあたる。

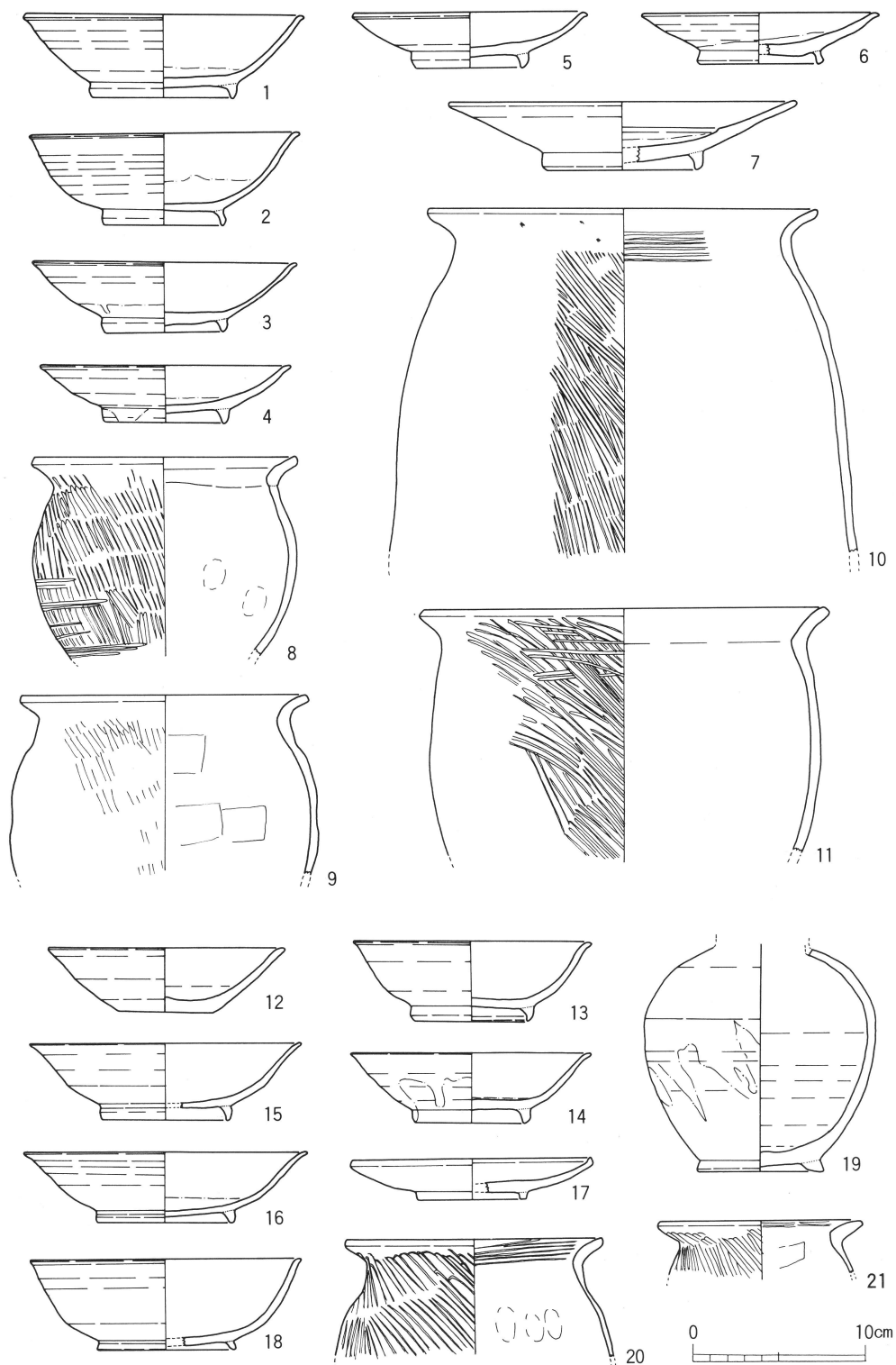
この時期の遺物として、三の丸A区SB11、D区SB02・SK166出土遺物がある。SB11は一辺5mの方形の竪穴住居で、中央部覆土中よりほぼ同一レベルで完形に近い土器群が出土している（第3図—1～6）。SB02は一辺4.5m×6mの竪穴住居で床面上よりほぼ完形の杯類（第3図—7～12）が出土した。SK166は径1.8mの円形の土坑であるが、埋土の状態より、一時期に投棄されたと考えうる土器群が出土している。（第3図—13～30）

2期の遺物として、杯蓋・杯A・杯B・椀A・椀B・盤B・すり鉢・長頸瓶・双耳瓶・短頸壺・甕、土師器甕などがある。

杯蓋は天井部に回転ヘラケズリによる稜がついているものが多く、1期のようななめらかさはない。口縁端部は屈曲が強くなる。口径は14.5cmを中心とするもので、杯Bの他、杯A等への対応もあるものと思われる。杯Aは底部に回転糸切り痕を残すものもあるが、ほとんどのものは回転ヘラケズリにより平底にしあげ、腰に稜をつける。口径によりAⅠ（12.7×4.3）・AⅡ（9.5×3.2）に分かれる。杯Bは量的に減少し、口径も3種類になる。杯BⅠ（22.0×7.4）は口縁端部にななめに平坦面をつくるもので、やや高めの高台がつく。杯BⅡ（口径約15cm）はⅠ期とあまり変わらない。杯BⅢは腰に明瞭な稜をもつもので、内底面は工具等により平坦になでられているものと思われる。椀Aは器高が少し高くなる。椀Bは図示しえなかったが、Ⅰ期と違い口径が小さく、椀Aに高台を付した器形である。盤Bは口縁端部を屈曲させるようになり、口径によりBⅠ（17.2×3.0）・BⅡ（14.0×3.0）に分かれる。土師器甕は口縁部が少し短くなり、大きく開くようになる。調整等はあま



第3図 三の丸遺跡出土土器(2) (1~6 A区S B11、7~12 D区S B02)
(13~30 D区S K166)



第4図 三の丸遺跡出土土器(3) (1~11 A区S K807、12~21 A区S B104)

り変わらない。

3期（9世紀中葉～10世紀前葉）〔第4図〕

この時期になると須恵器はほとんど見られなくなり、供膳形態を中心として灰釉陶器が増加する。生産地に対応させればK-14号窯期・K-90号窯期にあたる。

この時期にあたるものとして三の丸A区SB104・SK807などがあげられる。SB104は北壁中央にカマドをもつ一辺5mの方形の竪穴住居である。住居址内の土坑と床面上よりほぼ同時期の土器群が出土している（第4図-1～11）。SK807は径1.5mほどの円形の土坑で埋土の状況より短期間に埋ったものと思われる（第4図-12～21）。

器種としては須恵器杯蓋・杯A・椀A・椀B・すり鉢・横瓶・短頸壺・甕・灰釉陶器椀・皿・長頸瓶・平瓶・土師器甕などがある。

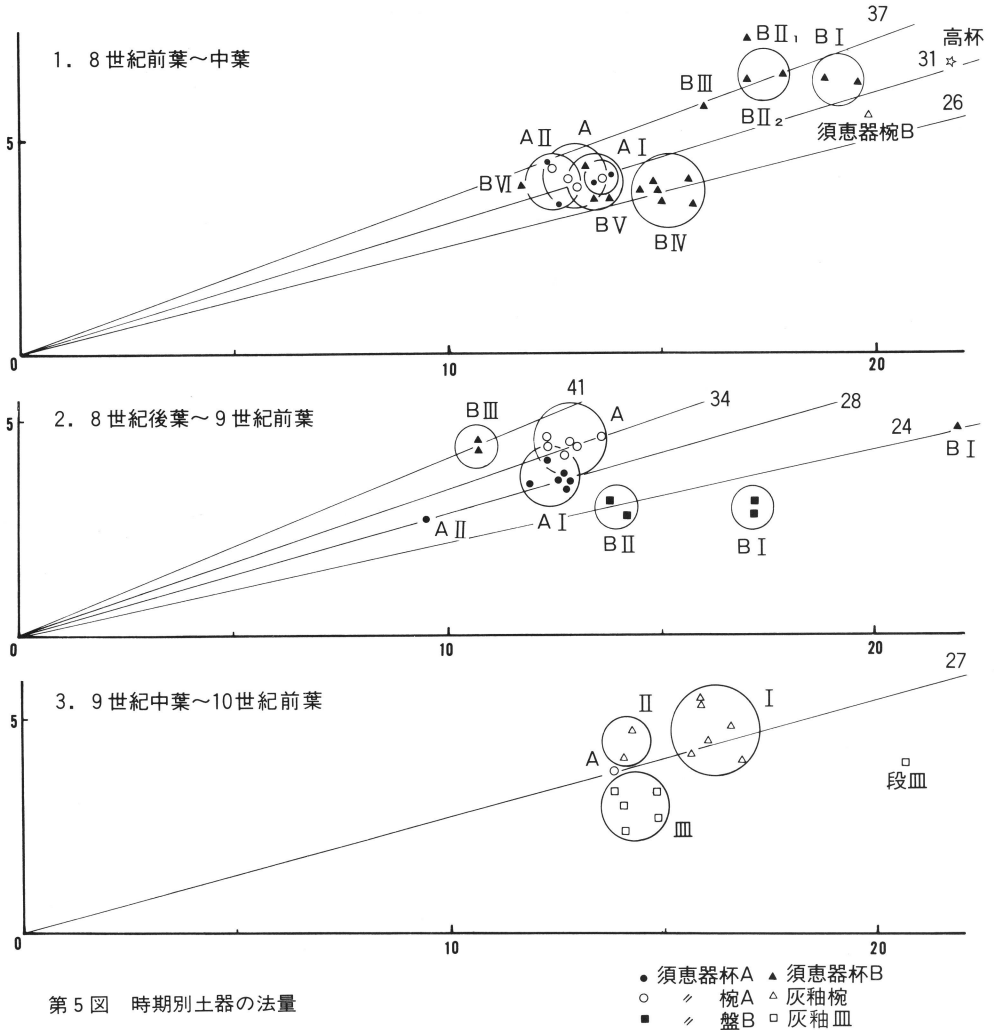
須恵器杯蓋・杯A・椀Bは2期とあまり変化はない。椀Aは口径がやや大きくなる。灰釉陶器椀は体部内・外面に灰釉をハケ塗りするものと内面のみ施釉するものが見られる。口径によりI（16.0×4.5）・II（14.1×4.5）に分けられる。無釉の椀（第4図-18）は体部をヘラミガキ調整し、ていねいに作られている。灰釉陶器皿は、体部がまっすぐ伸びるもの（第4図-5・6）や口縁端部を上折りまげるもの（第4図-17）、いわゆる段皿タイプ（第4図-7）などがある。灰釉陶器長頸瓶は口頸部を欠いているが肩に灰釉をハケ塗りしている。土師器甕は口頸部が少し厚味をもち長くなる。調整については1・2期と変化はない。

III 出土土器の検討

以上、各時期にわたり出土土器の様相を述べてきたが、それぞれの時期により特色が見られた。この章ではそれらをはっきりさせるために i) 法量、ii) 器種構成という2つの視点から当該期の土器を検討してみたい。

i) 法量について

法量については、飛鳥・平城宮出土土器の分析をおこなった西弘海氏が規格性をもった器種分化が「律令的土器様式」の特徴であることを指摘している（西1982）。筆者も飛鳥・平城宮出土土器と猿投窯出土須恵器の法量の規格性に言及したことがあった（城ヶ谷1984）。詳細はそちらを参照していただくことにして、簡単に生産地の様相を述べると、全体的な流れとして、猿投窯では飛鳥・平城京出土土器と同様に7世紀後半より供膳形態に器種分化がおり、8世紀前半には最もバラエティに富むようになるが、8世紀中葉以降器種が減少するようになる。9世紀についてもこの傾向は続き、9世紀中葉より須恵器にかわって灰釉陶器が中心となってくる。また器種分化に見られる特徴として次の5つを挙げた。



第5図 時期別土器の法量

- ①無台杯身は基本的に径高指数に沿って分化する。
- ②有台杯身は基本的に器高に沿って分化する。
- ③無台杯身の生産の中心は約12cmである。
- ④有台杯身の生産の中心は約15cmである。
- ⑤各時期について法量が大きく変更されることはない。

以上、筆者は主として7・8世紀の分析をおこなったが、齊藤孝正氏によれば8・9世紀についても①～⑤は基本的に認められるという（齊藤1987）。

次に三の丸遺跡について見てみると下のようなことがいえる。

- 1) 杯Aは8～9世紀前葉は2つの口径で、径高指数に沿って分化する。
- 2) 無台形態（杯A・碗A）の口径の中心は12～13cmである。
- 3) 杯Bは8世紀前葉～中葉では6つの口径で、8世紀後葉～9世紀前葉になると3つ

時 期	8 C 前～中	8 C 後～9 C 前	9 C 中～10 C 前
器 種	個体数 (%)	個体数 (%)	個体数 (%)
須 恵 器 杯 蓋	7.5 (26)	8.5 (30)	0.1 (0.6)
〃 杯 A	3.1 (11)	4.0 (14)	0.3 (2)
〃 杯 B	11.2 (39)	2.4 (8)	—
〃 碗 A	0.7 (2)	6.2 (22)	1.1 (6)
〃 碗 B	0.7 (2)	+	+
灰 釉 陶 器 碗	—	—	5.7 (32)
〃 皿	—	—	2.8 (16)
須 恵 器 盤 B	0.2 (0.7)	2.4 (8)	+
〃 盤 C	0.9 (3)	—	—
〃 高 杯	+	—	—
供 膳 具 小 計	24.3 (83.7)	23.5 (82.0)	10.0 (56.6)
須 恵 器 鉢	+	+	0.2 (1)
調 理 具 小 計	0 (0)	0 (0)	0.2 (1)
須 恵 器 平 瓶	+	+	+
灰釉陶器 } 長頸瓶	0.3 (1)	0.4 (1)	0.2 (1)
須 恵 器 横 瓶	0.7 (2)	+	0.2 (1)
〃 壺・(蓋)	0.8 (3)	0.5 (2)	0.3 (2)
〃 甕	0.3 (1)	+	+
そ の 他	鼈 十	双耳瓶1.0 (4)	—
貯 蔵 具 小 計	2.1 (7)	1.9 (7)	0.7 (4)
須 恵 器 甌	0.3 (1)	—	—
土 師 器 甕	1.8 (6)	3.5 (12)	6.9 (39)
煮 炊 具 小 計	2.1 (7)	3.5 (12)	6.9 (39)
計	28.5 (97.7)	28.5 (101)	17.8 (100.6)

表1 器種構成 (口縁部計測法による。)

泉

II₂)は器高約6.4cm、口径15cm以下のもの(BⅣ・BⅤ・BⅥ)は器高約3.9cmで、それぞれそろっている。ただし、8世紀後葉以降は数量的に減少し確認することは難しい。7)・8)について、猿投窯・美濃窯における法量がこの時期では碗で3～4種、皿で1～2種であることから⁹⁾、生産地よりは若干器種が少ないことがわかる。

第5図の法量の表を猿投窯のものと比較してみると、器種分化としては猿投窯の方が豊富である。特に口径の大きなものが集落では少ないようである。三の丸遺跡では5間×3間の堀立柱建物や緑釉陶器、墨書土器、円面硯なども出土しており、その性格づけは難しいが、大きく見れば平均的な集落としての器種分化のモデルとなるものであろう。その意味では猿投窯の生産品はより公的な意味を持つものも多いと言えよう。

ii) 器種構成について

表1は各時期の代表的な遺構出土遺物の数を口縁部計測法により数えたものである。口

の口径になり、器種が減少している。

4) 杯Bは基本的に器高に沿って器種分化する。

5) 杯Bの口径の中心は約15cmである。

6) 盤Bは器高に沿って器種分化する。

7) 灰釉陶器碗は9世紀中葉～10世紀前葉では2法量である。

8) 灰釉陶器皿は9世紀中葉～10世紀前葉では1法量である。(段皿を除く)

1)・2)については猿投窯における①・③にほぼ対応するものである。4)・5)については猿投窯における②・④によく対応している。8世紀前葉～中葉において杯Bは口径の大きなもの(BⅠ・B

縁部はないが、存在を確認できるものについては+で表した。この表から言えることは次のようなことである。

- 1) 供膳具は8世紀～9世紀前葉では全体の80%以上を占める。
- 2) 供膳具では8世紀前葉～中葉にかけては有台形態(杯B)が中心であったが、8世紀後葉になると無台形態(杯A・椀A)が中心となる。
- 3) 9世紀中葉になると供膳具の主体は灰釉陶器椀・皿となり、須恵器は若干これに加わるのみとなる。
- 4) 調理具は各時期を通じて1%以内である。
- 5) 貯蔵具は各時期を通じてほぼ5%前後である。
- 6) 煮炊具は7%～39%で変動がある。
- 7) 須恵器と土師器の関係では、各時期を通じて供膳具・調理具・貯蔵具はすべて須恵器(灰釉陶器も含めて)が占めるのに対し、土師器は煮炊具の甕のみである。

1)・2)・3)について、出土遺物はほとんど杯蓋・杯身を中心とする供膳具で占められる。供膳具のなかでも、8世紀前葉～中葉では杯Bを中心とし、杯蓋、杯Aが加わる。8世紀後葉になると杯Bが減少し、杯A・椀Aが主体となり、これに杯B・杯蓋・盤B⁽¹⁰⁾が加わる。9世紀中葉になり灰釉陶器の生産が本格化すると、供膳具はほとんど灰釉陶器に移り変わり、須恵器と灰釉陶器の比率は1:6ほどになる。5)について貯蔵具では、長頸瓶・横瓶・壺・甕等が、ほぼ一定の割合で見られる。これらの形を見てみると細部は変化する点はあるが、大きく見れば何ら変化のない器種といえる。6)について、8世紀～9世紀前葉については土師器甕はほぼ10%前後の比率であったが、9世紀中葉～10世紀前葉にかけて39%になる。この数値の評価については比較資料も少ないため保留しておきたい。7)について、土師器は甕のみしか見られなかった。甕でさえも須恵器でつくられる場合が多く、この地域で須恵器が卓抜することの証明であろう。土師器の供膳具が見られない点⁽¹¹⁾は平城京を始めとし、他地域と比較すると特異な感がある。このような状況は美濃の東山浦遺跡、重竹遺跡、三井遺跡でも同様である。恐らく、尾張・美濃全体に当てはまることであろう。猿投窯、尾北窯、美濃須衛窯といった巨大な生産地を持った地域の特殊性と言うべきであろうか。

IV まとめ

本論は三の丸遺跡出土土器を中心として、尾張の一集落に見られる土器の様相を検討したものであった。今、住居内での食器構成を考えてみると、8世紀前葉～中葉ではおそらく銘名器であろう蓋付の有台杯身数個体に無台杯身・高杯などが加わる。しかも、この有

台杯身は大きさにバラエティがある。ところが8世紀後葉になると、口径12～13cmの無台碗・杯が中心となり、これに有台杯・杯蓋・盤が伴うようになる。9世紀中葉では、口径が同じくらいの灰釉陶器碗・皿が主体で須恵器杯蓋・無台杯身などが若干伴うのである。調理具・貯蔵具では、各時期とも、すり鉢・長頸瓶・壺・甕が少し見られる。煮炊具では土師器甕が各時期に数個伴うものと思われる。

三の丸遺跡出土遺物の検討により、集落での土器のあり方ある程度把握できたが、はたしてこれが尾張全体へ普遍的に妥当しうものかどうかは確証できない。また、時期区分についても、もう少し検討する必要も感じられる。その他、種々の問題もあるが、今回はとりあえず事実を指摘し、踏み台をつくることのみにとどめ、尾張全体での資料の整備を待つて再び論じてみたいと思う。

(1989. 1. 25)

〔謝辞〕

本稿を草するにあたり、名古屋大学橋崎彰一先生、同齊藤孝正氏、名古屋市見晴台考古資料館木村有作氏には種々の御教示を頂いた。末尾ながら記して謝意を表する次第です。

註

- (1)「三の丸遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報—昭和63年度—』1989
- (2)例えば伊勢山中学校遺跡(名古屋市教育委員会『伊勢山中学校遺跡』II 1985)では竪穴住居5軒、竪三蔵遺跡(名古屋市教育委員会『第III次竪三蔵遺跡発掘調査概要報告書』1986)では6軒の竪穴住居が見つかっている。
- (3)富加町教育委員会『東山浦遺跡』1978
- (4)関市教育委員会『重竹遺跡—その2—』1981、『重竹遺跡—その3—』1984
- (5)各務原市教育委員会『三井遺跡・六軒遺跡』1981
- (6)基本的な編年観は橋崎他1983に従った。
- (7)「清洲城下町遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報—昭和62年度—』1988、13～14頁。
- (8)器種分類の基本として、供膳形態で無台のものをA、有台のものをB、脚付のものをCとした。供膳形態以外のものについては通有の器種名を付した。
- (9)齊藤1986による。
- (10)盤Bは文献などの例に見られる「後盤」的な用途も考えられるが、内面を観察すると全体的に磨滅しており、皿のような容器としての使用を考えた方が妥当であろう。
- (11)春日井市勝川遺跡で土師器杯が見られるが量的にわずかであり、評価は難しい。今後類例の増加を待つて検討してみたい。

引用・参考文献

- イ 池本正明 1987 「大淵遺跡Ⅲ期に見る平安時代の土器」『愛知県埋蔵文化財センター年報—昭和61年度—』105～112頁。
- ウ 宇野隆夫 1988 「越中の国府・荘園・村落—食器の構成にみる国家と民衆—」『高井悌三郎先生喜寿記念論文集』565～597頁。
- サ 齊藤孝正 1986 「灰釉陶器の研究Ⅰ—岐阜県・愛知県下の集落址出土例の分析—」『名古屋大学文学部論集』XCV 131～172頁。
- 1987 「猿投窯Ⅳ期における須恵器生産の様相—杯類・碗類・盤類の変遷に関する予察—」『名古屋大学文学部論集』XCVIII 113～147頁。
- シ 城ヶ谷和広1984 「七、八世紀における須恵器生産の展開に関する一考察—法量の問題を中心に—」『考古学雑誌』70—2 9～37頁。
- ナ 橋崎彰一他1983 『愛知県古窯址群分布調査報告』Ⅲ
- ニ 西弘 海 1982 「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古希記念論文集』447～471頁。